

弘治司印全集

第十五卷



谷崎潤一郎全集 第十五卷

定價一五〇〇圓

昭和四十三年一月二十五日初版發行
昭和四十八年十二月十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 高梨 茂

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二―一
電話(五六一)五九二一
振替東京三四

細

雪

上
卷

昭和十八年一月號、三月號「中央公論」
昭和十九年七月『細雪 上卷』（私家版）

「こいさん、頼むわ。——」

鏡の中で、廊下からうしろへ這入つて來た妙子を見ると、自分で襟を塗りかけてゐた刷毛を渡して、其方
は見ずに、眼の前に映つてゐる長襦袢姿の、抜き衣紋の顔を他人の顔のやうに見据ゑながら、

「雪子ちゃん下で何してる」

と、幸子^{さち}はきいた。

「悅ちゃんのピアノ見たげてるらしい」

——なるほど、階下で練習曲の音がしてゐるのは、雪子が先に身支度をしてしまつたところで悦子に擱
まつて、稽古を見てやつてゐるのであらう。悦子は母が外出する時でも雪子さへ家にゐてくれれば大人し
く留守番をする兒であるのに、今日は母と雪子と妙子と、三人が揃つて出かけると云ふので少し機嫌が悪
いのであるが、二時に始まる演奏會が濟みさへしたら雪子だけ一と足先に、夕飯までには歸つて來て上げ
ると云ふことでどうやら納得はしてゐるのであつた。

「なあ、こいさん、雪子ちゃんの話、又一つあるねんで」

「さう、——」

姉の襟頸から兩肩へかけて、妙子は鮮かな刷毛目をつけてお白粉を引いてゐた。決して猫背ではないのであるが、肉づきがよいので堆く盛り上つてゐる幸子の肩から背の、濡れた肌の表面へ秋晴れの明りがさしてゐる色つやは、三十を過ぎた人のやうでもなく張りきつて見える。

「井谷さんが持つて來やはつた話やねんけどな、——」

「さう、——」

「サラリーマンやねん、MB化學工業會社の社員やて。——」

「なんぼぐらゐもろてるのん」

「月給が百七八十圓、ボーナス入れて二百五十圓ぐらゐになるねん」

「MB化學工業云うたら、佛蘭西系の會社やねんなあ」

「さうやわ。——よう知つてるなあ、こいさん」

「知つてるわ、そんなこと」

一番年下の妙子は、二人の姉のどちらよりもさう云ふことには明るかつた。そして案外世間を知らない姉達を、さう云ふ點ではいくらか甘く見てゐて、まるで自分が年嵩のやうな口のきゝ方をするのである。

「そんな會社の名、私は^{あたし}聞いたことあれへなんだ。——本店は巴里にあつて、大資本の會社やねんてな

あ」

「日本にかて、神戸の海岸通に大きなビルディングあるやないか」

「さうやて。そこに勤めてはるねんて」

「その人、佛蘭西語出來はるのん」

「ふん、大阪外語の佛語科出て、巴里にもちよつとぐらゐ行てはつたことあるねん。會社の外に夜學校の佛蘭西語の教師してはつて、その月給が百圓ぐらゐあつて、兩方で三百五十圓はあるのやて」

「財産は」

「財産云うては別にないねん。田舎に母親が一人あつて、その人が住んではる昔の家屋敷と、自分が住んではる六甲の家と土地とがあるだけ。——六甲のんは年賦で買うた小さな文化住宅やさうな。まあ知れ

たもんやわ」

「それでも家賃助かるよつてに、四百圓以上の暮し出來るわな」

「どうやろか、雪子ちゃんに。係累はお母さん一人だけ。それから田舎に住んではつて、神戸へは出て來やはれへんねん。當人は四十一歳で初婚や云やはるし、——」

「何で四十一まで結婚しやはれへなんだやろ」

「器量好みでおくれた、云うてはるねん」

「それ、あやしいなあ、よう調べてみんことには」

「先方はえらい乗り氣やねん」

「雪あんちゃんの寫眞、行つてたのん」

幸子の上にもう一人本家の姉の鶴子がゐるので、妙子は幼い頃からの癖で、幸子のことを「中姉ちゃんなかあんな」、雪子のことを「雪姉ちゃんゆきあんな」と呼びならはしたが、その「ゆきあんちゃん」が詰まつて「きあんちゃん」

と聞えた。

「いつか井谷さんに預けといたのんを、勝手に先方へ持つて行かはつてん。何やたいそう氣に入つてはるらしいねんで」

「先方の寫真ないのんか」

階下のピアノがまだ聞えてゐるけはひなので、雪子が上つて來さうもないと見た幸子は、

「その、一番上の右の小抽出あけて御覽、——」

と、紅棒を取つて、鏡の中の顔へ接吻しさうなおちよぼ口をした。

「あるやろ、そこに」

「あつた、——これ、雪あんちゃんに見せたのん」

「見せた」

「どない云うた」

「例に依つてどないも云はへん、『あゝ此の人』云うたゞけや。こいさんどう思ふ」

「これやつたらまあ平凡や。——いや、いくらかえゝ男の方か知らん。——けどどう見てもサラリー

マントイプやなあ」

「さうかて、それに違ひないねんもん」

「一つ雪あんちゃんにえゝことがあるで。——佛蘭西語教せてもらへるで」

顔があらかた出來上つたところで、幸子は「小槌屋吳服店」と記してある疊紙の紐を解きかけてゐたが、

ふと思ひついて、

「そやつた、あたし『B足らん』やねん。こいさん下へ行つて、注射器消毒するやうに云うといてんか」

脚氣は阪神地方の風土病であるとも云ふから、そんなせるかも知れないけれども、此處の家では主人夫婦を始め、ことし小學校の二年生である悦子までが、毎年夏から秋へかけて脚氣に罹り／＼するので、ヴィタミンBの注射をするのが癖になつてしまつて、近頃では醫者へ行く迄もなく、強力ベタキシンの注射薬を備へて置いて、家族が互に、何でもないやうなことにも直ぐ注射し合つた。そして、少し體の調子が悪いと、ヴィタミンB缺乏のせるにしたが、誰が云ひ出したのかそのことを「B足らん」と名づけてゐた。

ピアノの音が止んだと見て、妙子は寫眞を抽出に戻して、階段の降り口まで出て行つたが、降りずにそこから階下を覗いて、

「ちよつと、誰か」

と、聲高こゑたかに呼んだ。

「——御寮人ごれうじんさん注射しやはるで。——注射器消毒しといてや」

二

井谷と云ふのは、神戸のオリエンタルホテルの近くの、幸子きこたちが行きつけの美容院の女主人なのである

が、縁談の世話をするのが好きと聞いてゐたので、幸子がかねてから雪子のことを頼み込んで、寫眞を渡しておいたところ、先日セツトに行つた時に、「ちよつと奥さん、お茶に付き合つて下さいませんか」と手の空いた隙に幸子を誘ひ出して、ホテルのロビーで始めて此の話をしたのである。實はこちらへ御相談をしないで悪かつたけれども、ぐづ／＼してゐて良い縁を逃がしてはと思つたので、お預かりしてあつたお嬢様のお寫眞を何ともつかず先方へ見せたのが、一箇月半程も前のことになる。それきり暫く音沙汰がなかつたので、自分は忘れかけてゐたのであつたが、先方ではその間にお宅さんのことを調べた模様で、大阪の御本家のこと、御分家のお宅さんのこと、それから御本人のことについては、女學校へも、習字やお茶の先生の所へも、行つて尋ねたらしい。それで御家庭の事情は何も彼も知つてゐて、いつかの新聞の事件なども、あの記事が誤りだと云ふことはわざ／＼新聞社まで行つて調べて來てゐるくらゐなので、よく諒解してゐたけれども、なほ自分からも、そんなことがあるやうなお嬢様かどうかまあお會ひになつて御覽なさいと云つて、納得が行くやうに説明はしておいた。先方は謙遜して、蔭岡さんと私とは身分違ひでもあり、薄給の身の上で、さう云ふ結構なお嬢様に來て戴けるものとも思へないし、來て戴いても貧乏所帯で苦勞をさせるのがお氣の毒のやうだけれども、萬一縁があつて結婚出來るならこんな有難いことはないから、話すだけは話してみてもいいと云つてゐる。自分の見たところでは、先方も祖父の代までは或る北陸の小藩の家老職をしてゐたとかで、現に家屋敷の一部が郷里に残つてゐると云ふのであるから、家柄の點ではさう不釣合でもないのではあるまいか。お宅さんは舊家でおありになるし、大阪で「蔭岡」と云へば一時は聞えていらしつたに違ひないけれども、——かう申しては失禮であるが、いつ迄もさう

云ふ昔のことを考へておいでになつては、結局お嬢様が縁遠くおなりになるばかりだから、大概なところで御辛抱なすつたらいかがであらうか。現在では月給も少いけれども、まだ四十一だから昇給の望みもないことはないし、それに日本の會社と違つてわりに時間の餘裕があるので、夜學の受持時間の方をもつと殖やして四百圓以上の月收にすることは容易だと云つてゐるから、新婚の所帶を持つて女中を置いて暮して行くには先づ差支へあるまい。人物については、自分の二番目の弟が中學時代の同窓で、若い時からよく知つてゐるので、太鼓判を捺すと云つてゐる。さう云つてもお宅さんの手で一往お調べになるに越したことはないけれども、結婚がおくれた原因は全く器量好みのため外に理由はないと云ふのが、矢張ほんたうらしく思へる。それは巴里にも行つてゐたのだし、四十を越してもゐることだから、まるきり女を知らない筈はないだらうけれども、自分が此の間會つて見た感じでは、それこそ生真面目なサラリーマンで、遊びの味などを知つてゐるさうな様子は微塵もなかつた。器量好みなど云ふことは、得てさう云ふ堅人かたじんによくあるものだが、その人も巴里を見て來た反動でか、奥さんは純日本式の美人に限る、洋服なんか似合はなくてもよい、しとやかで、大人しくて、姿がよくて、和服の着こなしが上手で、顔立も勿論だけれども、第一に手足のきれいな人がほしいと云ふ注文なので、お宅のお嬢様なら打つてつけだと思ふのであるが、——と云ふやうな話なのであつた。

長らく中風症で臥たきりの夫を扶養しつゝ美容院を經營して、かたはら一人の弟を醫學博士にまでさせ、今年の春には娘を目白に入學させたと云ふだけあつて、井谷は普通の婦人よりは何層倍か頭腦の廻轉が速く、萬事に要領がよい代りに、商賣柄どうかと思はれるくらゐ女らしさに缺けてゐて、言葉を飾るやうな

廻りくどいことをせず、何でも心にあることを剥き出しに云つてのけるのであるが、その云ひ方がアクトクなく、必要に迫られて眞實を語るに過ぎないので、わりに相手に悪感を與へることがないのであつた。幸子も最初、井谷がいつもの急き込むやうな早口でしゃべるのを聞いてゐると、随分此の人はと思ふところもあつたけれども、段々聞いて行くうちに、男勝りの親分肌な氣象から好意で云つてくれてゐることがよく分るし、それに何よりも、理路整然と、打ち込む隙もなく話しかけて來られるので、ぐつと俯伏せに取つて抑へられてしまつた感じがした。そして、では早速本家の方とも相談をし、又此方でもその人の身元を調べるだけは調べさせて戴いてと、その時はさう云つて別れたのであつた。

幸子の直ぐ下の妹の雪子が、いつの間にか婚期を逸してもう卅歳にもなつてゐることについては、深い譯がありさうに疑ふ人もあるのだけれども、實際は此れと云ふほどの理由はない。たゞ一番大きな原因を云へば、本家の姉の鶴子にしても、幸子にしても、又本人の雪子にしても、晩年の父の豪華な生活、蒔岡と云ふ舊い家名、——要するに御大家であつた昔の格式に囚はれてゐて、その家名にふさはしい婚家先を望む結果、初めのうちは降る程あつた縁談を、どれも物足りないやうな氣がして斷り／＼したものだから、次第に世間が愛憎をつかして話を持つて行く者もなくなり、その間に家運が一層衰へて行くと云ふ状態になつた。だから「昔のことを考へるな」と云ふ井谷の言葉は、ほんたうに爲めを思つた親切な忠告なので、蒔岡の家が全盛であつたのはせい／＼大正の末期までのことで、今ではその頃のことを知つてゐる一部の大阪人の記憶に残つてゐるに過ぎない。いや、もつと正直のことを云へば、全盛と見えな大正の末頃には、生活の上にも營業の上にも放縱であつた父の遣り方が漸く祟つて來て、既に破綻が續出しかけてゐたので

あつた。それから間もなく父が死に、營業の整理縮小が行はれ、次いで舊幕時代からの由緒を誇る船場の店舗が他人の手に渡るやうになつたが、幸子や雪子はその後も長く父の存生中のことを忘れかねて、今のビルディングに改築される前までは大體昔の俤をとめてゐた土藏造りのその店の前を通り過ぎ、薄暗い暖簾の奥を懷しげに覗いてみたりしたものであつた。

女の子ばかりで男の子を持たなかつた父は、晩年に隱居して家督を養子辰雄に譲り、次女幸子にも婿を迎へて分家させたが、三女雪子の不仕合せは、もうその時分そろ／＼結婚期になりかけてゐたのに、とう／＼父の手で良縁を捜して貰へなかつたこと、義兄辰雄との間に感情の行き違ひが生じたこと、などにもあつた。いつたい辰雄は銀行家の忤で、自分も養子に來る迄は大阪の或る銀行に勤めてゐたのであり、養父の家業を受け繼いでからも實際の仕事は養父や番頭がしてゐたやうなものであつた。そして養父の死後、義妹たちや親戚などの反對を押し切つて、まだ何とか蹶ん張れば維持出來たかも知れなかつた店の暖簾を、蒔岡家からは家來筋に當る同業の男に譲り、自分は又もとの銀行員になつた。それと云ふのは、派手好きな養父と違ひ、堅實一方で臆病でさへある自分の性質が、經營難と闘ひつゝ不馴れな家業を再興するのに不向きなことを考へ、より安全な道を選んだ結果で、當人にすれば養子たる身の責任を重んじたからこそ處置なのであるが、雪子は昔を戀ふるあまり、さう云ふ義兄の行動を心の中で物足りなく思ひ、亡くなつた父もきつと自分と同様に感じて、草葉の蔭から義兄を批難してゐるであらうと思つてゐた。と、ちやうどその時分、——父が死んで間もない頃、義兄がたいそう熱心に彼女に結婚をすゝめた口があつた。それは豊橋市の素封家の嗣子で、その地方の銀行の重役をしてゐる男で、義兄の勤める銀行がその銀行の

親銀行になつてゐる關係から、義兄はその男の人物や資産狀態などをよく知つてゐると云ふ譯であつた。そして豊橋の三枝家さいぐさならば格式から云つても申分はないし、現在の蒔岡家に取つては分に過ぎた相手であるし、本人も至つて好人物であるからと、見合ひをするまでに話を進行させたのであつたが、雪子はその人に會つて見て、どうにも行く氣になれなかつたのであつた。と云ふのは、別に男振がどうかうと云ふのではないが、如何にも田舎紳士と云ふ感じで、なるほど好人物らしくはあるけれども、知的なところが全くない顔つきをしてゐた。聞けば中學を出た時に病氣をしたとかで上の學校へは這入らなかつたと云ふのであるが、恐らく學問の方の頭は良くないのであらうと思ふと、女學校から英文専修科までを優秀な成績で卒業した雪子としては、さき／＼その人を尊敬することが出來さうもない懸念があつた。それに、いくら資産家の跡取で生活の保證はあるにしても、豊橋と云ふやうな地方の小都會で暮すことは淋しさに堪へられない氣がしたが、それには誰よりも幸子が同情して、そんな可哀さうなことがさせられるものかと云つたりした。義兄にしてみれば、義妹は學問はよく出來たかも知れないけれども、少し因循過ぎるくらゐ引つ込み思案の、日本趣味の勝つた女であるから、刺戟の少い田舎の町で安穩に暮して行くのには適してゐるし、定めし本人にも異存はあるまいと極めてかゝつたのが、案に相違したのであつたが、内氣で、含羞屋かみで、人前では満足に口が利けない雪子にも、見かけに依らない所があつて、必ずしも忍従一方の婦人ではないことを、義兄が知つたのはその時が最初であつた。

が、雪子にしても、お腹の中ではつきり「否いや」にきまつてゐることなら、早くさう云へばよいものを、どうとも取れるやうな生返事ばかりしてゐて、いよ／＼となつてから、それも義兄や上の姉には云はないで、

幸子に打ち明けたのは、一つには餘りにも熱心な義兄の手前、云ひ出しにくかつたせゐもあらうが、さう云ふ風に言葉數の足りないのが、彼女の悪い癖なのであつた。そのために義兄は内心否でないものと感違ひをし、先方も見合ひをしてからは、急に乗り氣になつて是非にと懇望して來ると云ふ譯で、話は退つ引きならない所まで進んだのであつたが、一旦「否」の意志表示をしてからの雪子は、さうなると義兄や上の姉が代るく口を酸くして頼むやうにして勧めても、最後まで「うん」と云ふことを云はないでしまつた。今度は泉下の養父にも喜んで貰へると思つてかゝつた縁談であるだけに、義兄の失望は大きかつたが、それより困つたのは、先方に對し、仲に立つて斡旋してくれた銀行の上役の人に對し、今更挨拶のしやうがなくて冷汗の出る思ひをしたこと、——それも、尤もに聞える理由があるならばだけでも、顔が知的でないなどゝ下らぬ難癖をつけて、こんな、二度とありさうにもない勿體ない縁を嫌ふと云ふのは、たゞ雪子の我が儘で、邪推をすれば、故意に兄を苦しい立ち場に陥れてやらうと云ふ底意があるのではないかとさへ、取れないでもなかつた。

それから此方、義兄は雪子の縁談には懲りくした形で、他人が持つて來てくれる話には喜んで耳を傾けるけれども、自分が積極的に取り持つことや、先に立つて良い悪いの意見を述べることは、出來れば避けたいと云ふ風に見えた。

三

雪子を縁遠くしたもう一つの原因に、井谷の話の中に出た「新聞の事件」と云ふものがあつた。

それは今から五六年前、當時廿歳^{はたち}であつた末の妹の妙子が、同じ船場の舊家である貴金屬商の奥畑家の倅と戀に落ちて、家出をした事件があつた。雪子をさしおいて妙子が先に結婚することは、尋常の方法ではむづかしいと見て、若い二人がしめし合はして非常手段に出たもので、動機は眞面目であるらしかつたが、執方の家でもそんなことは許すべくもなかつたので、直きに見つけ出して双方に連れ戻して、そのことはたわいもなく解消したかの如くであつたが、運悪くそれが大阪の或る小新聞に出てしまつた。而も妙子を間違へて、雪子と出、年齢も雪子の年になつてゐた。當時時岡家では、雪子のために取消を申し込んだものか、但しさうすれば半面に於いて妙子がしたことを裏書きするのと同じ結果を招く恐れがあり、それも智慧のない話であるからいつそ默殺してしまつたものと、當主辰雄が散々考へたのであつたが、過ちを犯した者はどうあらうとも、罪のない者に飛ばつちりを受けさせて置く譯には行かぬと思つたので、取消を申し込んだところ、新聞に載つたのはその取消ではなく、正誤の記事で、豫想した通り改めて妙子の名が出た。辰雄はその前に雪子の意見も聞いて見るべきであるとは心付いてゐただけども、聞いたところで取り分け自分に對しては口の重い雪子が、どうせ明瞭な答をしてくれさうもないことは分つてゐたし、義妹たちに相談すれば利害の相反する雪子と妙子との間が紛糾することもあらうしと考へ、妻の鶴子に話したゞけで、自分一人の責任でさう云ふ手段に出たのであつたが、正直のところを云へば、妙子を犠牲にしても雪子の冤を雪ぐことに依つて雪子によく思はれたいと云ふ底意が、いくらか働いてゐたかも知れない。それと云ふのが、養子の辰雄には、大人しいやうでその實いつまでも打ち解けてくれない雪子と云ふものが一番氣心の分らない扱ひにくい小姑なので、こんな機會に彼女の機嫌を取りたかつたこともあらう。